

# 仲間に伝えたい平和への想い

## 米機に掃射を浴びる 清瀬久留米の林田哲也さん

終戦の年に生まれた人が、現在72歳。戦争のことを語れる人となると、さらに年配者となり限られます。今回、その数少ない語り部の一人である清瀬久留米支部の林田哲也さんにお話をうかがいました。

終戦の年に生まれた人が、現在72歳。戦争のことを語れる人となると、さらに年配者となり限られます。今回、その数少ない語り部の一人である清瀬久留米支部の林田哲也さんにお話をうかがいました。

## 戦争は矛盾した世界 特攻へ行ったナイトウさん

「昨年支部の『戦争体験を語る』で戦争体験を語られたか。林田さん 戦後70年を迎え、シニアの会総会で自分たちの体験を若い世代に語り継ぐ使命があると話し合い、それではと仲間と当時の体験を語ることにしました。ちょうど自身は危ない目に遭われたことはあります。林田さん 何をしていたのかは覚えていませんが、竹藪の横の畑に妹(当時4歳くらい)



古名さんが提供した軍服などを前にする林田さん



小宮さん

## 大空襲で家族失う 台東の小宮利夫さん

台東支部でライトシルバーの会(シニアの会)の会長を務める小宮利夫さん(89歳)にお話をうかがいました。

【台東・豊・小宮利夫さん談】実家は今任んでいる所と同じ台東区竜泉にありまして。親父は畳屋、現在私の息子で3代目です。戦時中、江戸川の船堀にあったT鉄工所に住み込みで技能士養成として働いていました。

「ひよっとしたらもう来られなくなるかも」と挨拶しに顔を出した後、一機の戦闘機が家の上空をしばらく旋回して飛んで行きました。母がそれを見て「ナイトウさん、特攻林田さん 日本はやっぱり平和。戦争がないのは本当にいいことですよ。」

「1990年代には、当時東京土建本部厚生文化部の担当役員をやっていた、本部の会議で職人の持っている技術を表現する文化活動、発表の場の重要性を訴えました。東京土建本部も平和美術展の後援団体になっていたこともあります。また豊島支部では熊谷守一美術館で職人展をやったこともあります。」

## 平和美術展に出展

### 豊島・瓦工の葦塚作次さん

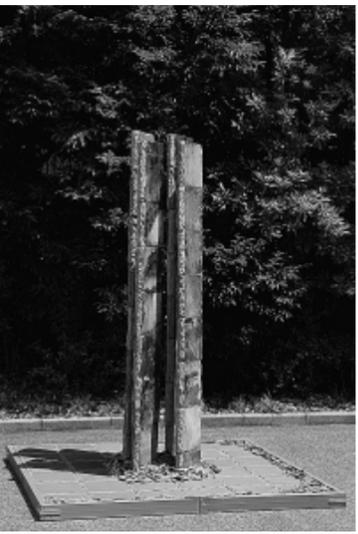


自宅の壁に「イタズラしてみま」と葦塚さん

「今年は『シルバーは永遠(とわ)』という作品を出展します。老齢化していく自然現象は誰もが避けえない共通の宿命です。問題は動けなくなった時、人間の尊厳が守れるかどうか、これはすべての人々の社会問題でもあるだろうというのが作品のコンセプトです」と語る豊島支部の瓦工の葦塚作次さん。平和美術展に葦塚さんが支部で書記

「戦争法や共謀罪が国会で強行採決されて、今まで声を上げていなかった人たちが平和への危機感を覚えて、行動に立ち上がり、社会に変化が出て来ている。平和、反戦を積極的にアピールするのが不自然でない、堂々と語るチャンスだと思っています」と葦塚さんは力を込めます。

★65周年記念・平和美術展のご案内  
〈開催日・時間〉8月14日(20日、9時30分〜17時、最終日は13時。〈会場〉東京都美術館(JR上野駅下車)〈入場料〉大人700円



都知事賞を受けた作品「最果てのシルバー」

## 母が見た広島被爆

### 多摩・稲城の岩武憲生さん

【多摩・稲城・設計・岩武憲生通信員】小学3年の頃、戦争の話をお母さんから聞きました。母は津和野女学校卒業前の昭和19年から終戦まで、呉の海軍工廠航空部に挺身隊として

勤労労働に従事していましたが、広島原爆投下の時の事を「朝礼の時、びかびかと光が走り、広島方面の空にもくもくとピンク色の雲がわいてきて、だんだん紫色に変わってきれいに見えた」と話し、当時の状況がまだ分らない様子がうかがえました。

終戦の玉音放送を聞いた時は「本当じゃろか?不安だったけど次の日の朝、何も起こらなかったんで、あー戦争は終わったんだと思ひ、これで家に帰れると嬉しかった」。実家に帰る途中、乗換で広島駅に途中下車。列車の窓には鏡音が下ろされ、「外は見えない」と言われたそうです。家に着くと祖母が「もう帰ってこんとあきらめとった」と言われて悲しかった。父は勤労学生として小倉にいました。本来の原爆投下目標地点の小倉が天候(曇)のため長崎に投下されました。

これまでの話はその時に聞いたもので、すでに両親は他界しています。もっと聞いておけば良かったと悔やまれます。6月、72年前に母が過した真に行っていました。

## 道具をもつ手は憲法守る

り、半永久的な寿命のあるエコ素材です。実際、地震や台風にも強い。私の会社で施工した仙台の本山孝勝寺の屋根瓦は、東日本大震災にあってもビクともしませんでした。葦塚さんの瓦への強い思い入れが伝わってきます。